



Gilletteのクリニック

(そこを通り抜けた者の目から)

「クリニックは患者を治す。ケアする共同体は人を支える」

I. クリニック

母がこう話していたのを覚えている。1960年代、私を産もうとしていた頃、クリニックは数えるほどしかなく、病院は病人の行くところだった。だから母は、産むのに選べるかぎり最良の場所を選んだ。自分の家の、自分のベッドだ。

私が生まれるとすぐ、そこにはひとりの女がいた。産婆と呼ばれていた女だ。彼女は母に言った。いい子が出てきた—もしあんたが要らないなら、私が家に連れて帰るよ、と。

母は一睨みで産婆を打ちのめした。だがおそらく産婆は知らなかったのだ。私が決してひとりの女だけのものにはならず、出会うすべての女のものになるということを。そして20年後、私は彼女の家に行った。約束は守る男だ。がっかりさせるわけにはいかなかった。

この書き出しは文学的な皮肉でも、冗談でもない。意味するところはただひとつ。クリニックという場所は新しいのだ。エジプト人から伝わったものでも、アッシリア人やバビロニア人から伝わったものでもない。病を商売に、薬をブランドに仕立てた医療システムの産物にすぎない。

クリニックは病院に取って代わろうとしたことは一度もない。病院は制度でありつづけている。それでもクリニックは、金を払えばもっと多くを—最良のものを—手にできると、患者にずっと信じ込ませてきた。

ある場所は機能を果たす。ある場所は可能性になる。

私の町にクリニックが開院した日のことだ。その種のものとしては初めて、診療科をひとつとり揃え、医学の全体を、少なくとも基本的なところはカバーできるクリニックだった—いわば、ふつうの人々のための医学である。

3人の医長が任命された。医療の体制を築くことになる人たちだ。医師を採用するための面接を終えると、3人は一室に閉じこもり、どうやって選ぶかについて意見を交わし

た。

ここから先は、真実としてではなく、ノワールとして書き留める—イタリアの公的医療を退職したばかりの医者友人たちが聞かせてくれた話で、彼らは営業畑の私たちを笑わせるために、そして自分たちにだって語る話はあるのだと知らせるために、よくこれを話していた。

私自身は井戸端の噂話だと思っている。医者たち自身がほかの医者について語るときに使っていた、あの苦い冗談のひとつだ—奇妙で風変わりな人種で、私ならもう飼い猫の世話さえ任せない。

評決としてではなく、肖像として書き記す。もはや自分たちのものとは感じられなくなった医学に対して、ふつうの人々がすでにどれほどの不信を溜め込んでいたかを映す肖像として。

話はこうだった。3人のうち最年長の男—旧体制の下でも働いたことのある男—が、新しい医師の選び方を説明しようと言った。本人いわく、数字の3の原理によって。

よくわかっている医者を見つけたら、一般診療に回せ。あそこなら経験を積むうちに、たいていの問いには自分で答えを出せるようになる。

そこそこの連中、腕はあるが冴えはしない連中を見つけたら、手術室に入れろ。そうすれば、開けてみて、そこにあるものを見て、直し方を覚える。

そしてろくにわかっていない連中や、政党の口利きや斡旋名簿でやって来る連中には、こういう持ち場をやれ—残酷な冗談はそう続いた—ほとんど何もかも、連中の代わりに自然がやってくれる持ち場を。

もちろん、これは井戸端版だ。そしてどんな井戸端の噂話もそうであるように、これが語っているのは医者たちのことよりも、語っていた側のことだ。彼らにどれほどわずかな信頼しか残っていなかったか、ということだ。

こうしてクリニックは生まれた。その本当の経験をしたのは患者たちだった。そしてそれを語ったのは生きている者だけだ—運に恵まれた者であって、不運に見舞われた者ではない。そしてすべてが悪いほうへ転んだとき、北のクリニックが—どの国の北であれ—より良いものの代名詞となった。北はいつも富と産業を思い起こさせてきたし、そこでは、金を払って受ける治療のほうが上等だという印象を与えるからだ。

やがて司法精神病院が閉鎖され、精神科クリニックが生まれた—のちに神経の病のほうへ転換されていく。診断書つきの狂人だけが治療されるのではなく、ほかの病も診るようになった。

II. エピローグ

クリニックは建物だ。ケアする共同体は、それ以上のものだ。

III. 著者のページ

この作品は依頼されて書いたものではない。

売られたものでもない。

商業目的で作られたものでもない。

リハビリテーションの価値、人間の尊厳の価値、そして人と人との関係の価値を証言するために書かれた。

求める対価は、象徴としての1ドルだけ—作品への支払いとしてではなく、ケアと希望と責任の文化をともに担うという約束の証として。

フェルディナンド